

観光立国の実現は 地方から



みかんの花香る 鵜飼いのまち・有田



鵜の習性を利用して鮎を捕る鵜飼。岐阜県長良川の鵜飼いが有名だが、全国13カ所で行われている。その中でも個性豊かな漁法「徒歩(かち)漁法」を今に伝えていくのが、和歌山県有田市の鵜飼いだ。漁業としてまた観光客の目玉として700年もの歴史を紡ぎ、県指定の無形民俗文化財にも指定されている有田の鵜飼いが、支援する協同組合の組合員や利用者の減少、また後継者の不在などの理由から、存続の危機を迎えている。有田の鵜飼いの現状と今後を、鵜飼協同組合の理事長も務める花田優・有田市観光協会会長と関係者から探った。【小林茉莉】

来年で文化財指定50年 俳句大会など催し 機運盛り上げ

光協会をへつ、1960年に「有田川鵜飼協同組合」を設立し、観光面から鵜飼いを支えています。しかし景気の悪化などで廃業した手引を引いたりして、今は2つの旅団だけが運営に携わっている状態です。鵜飼遊覧船の利用者の状況はどうか。花田 パル期ごろまで利用したのですが、近年は減少傾向で昨年は2800人程度でした。鮎漁の解禁に合わせ川開きを行い同時に鵜飼いも始めるのですが、今年は天候不順も重なって6月中に実施できたのは4回きり。また上流にあるダムが放流を行った場合には川の水が濁ってしまったため、予約も断られなければなりません。大阪や京都などからの利用者も増えています。和歌山と日帰りの圏内

俳句大会

有田川鵜飼協同組合

俳句大会のチラシ

有田川鵜飼協同組合

俳句大会のチラシ



望月良男・有田市長

我がまちへぜひお越しを

水面に松明の明かりで浮かび上がり、屋形船から周辺に見る光景は、訪れた方々を魅了の世界へ導く。他では味わうことができない感動を与えてくれます。この伝統の鵜飼いは、古くから文化の宝庫が豊富にあります。有田川は約700年の伝統がある。全国的にも珍しい「徒歩漁法」と言われ、日本一のおいしさを誇ります。また、この鵜飼いは、鵜飼いの歴史を伝えるだけでなく、海、山、川と自然に恵まれた、古くから文化の宝庫が豊富にあります。有田川は約700年の伝統がある。全国的にも珍しい「徒歩漁法」と言われ、日本一のおいしさを誇ります。また、この鵜飼いは、鵜飼いの歴史を伝えるだけでなく、海、山、川と自然に恵まれた、古くから文化の宝庫が豊富にあります。有田川は約700年の伝統がある。全国的にも珍しい「徒歩漁法」と言われ、日本一のおいしさを誇ります。また、この鵜飼いは、鵜飼いの歴史を伝えるだけでなく、海、山、川と自然に恵まれた、古くから文化の宝庫が豊富にあります。



花田優・有田市観光協会会長

利用者の割合が多く、市内のほかに観光バスツアーなどもある。現状をどう改善していくか、観光振興策を打ち出しています。知名度アップに努めていますが、難しいですね。市の観光誘客増大のための取り組み。花田 6月9日土曜日はみかんの里。エールンウィークの2週間ほどはみかんの花が咲き、町中がみかんの花香りでいっぱいになります。みかんの花街道ウォークというみかん畑を歩いたり、山道を歩いたり、海まで続くアップダウンの激しいみかん海道を走る「有田みかん海道ウォーク」などのイベントを行います。誘客を図っています。来年は有田の鵜飼いが文化財に指定され、50周年の記念の年となる花田 今年初め鵜飼いをテーマとした俳句コンクールを企画しました。小学生から大人まで幅広い年代の人に鵜飼いの魅力を

課題は集客と後継者 川との触れ合い通し 鵜飼いの理解拡大を

日本各地で観光鵜飼いに携わる鵜匠は、各観光協会の職員などの形で雇用されている場合が多い。しかし有田の鵜匠は、協同組合に加入しているもの、それぞれ別の仕事を持ち、その傍らで鵜匠を務める。鵜匠として30年以上となる吉田繁彦さん(66)も、葬祭業に携わる傍らで鵜匠を務めてきた。吉田さんの父親が半農半漁のような形で鵜飼いをしていたが、長く鵜に親しんできたのが鵜匠となったきっかけだ。有田の鵜匠の特徴は、徒歩漁法という漁法にあるが、もう一つの大きな特徴は、鮎を捕る際に、鵜匠は片手に火をついた松明、もう一方には鵜をよつする手綱を持ち、鵜とともに川の中に入る。4人でまとまって松明の火で水面近くを照らし、鵜を鮎のいるところまで誘導するのだ。水の深さが膝から胸程度のところを中心に進むが、「深いところでは立ち泳ぎをする」ともあって吉田さん、経験と体力がものを言う技だ。有田の鵜匠を支える鵜匠は、現在わずか4人。数人で鮎を追い込む徒歩漁法を維持するのは、限界の人数といえる。今年で来ている。最年長が75歳、最年少でも46歳と高齢化も課題だ。鵜匠としての収入は40万円ほど。鵜を取りに行ったり、鵜のエサの費用を負担したりすることなど、鵜匠としての採算の合う仕事ではない。「鵜飼いの仕事だけでは生活はできない。川と鵜が好きでなければできない」と話す吉田さん。「文化財を守る」という誇りを胸に鵜匠を続けているが、吉田さんの後継ぎはいない。鵜飼いの新しい担い手を育てるにも、和歌山出身の作家・有田和子の小説「有田川」にも登場する。招待しました。採算面では非常に厳しいところではあります。やはり生の鵜飼いを生かすには、多くの人を呼んでほしいです。昔に比べると鮎も減少し、また支える組合の状況も厳しく、この1、2年が勝負だと考えています。今は長く伝承してきた文化を絶やしてはならないという思いで頑張っている面が強いのですが、厳しいときこそ攻めたい、たくさんの方に来ていただけるよう努力を重ねていきます。



今年のみかんの花街道ウォーク



伝統漁法を守る4人の鵜匠



「水中を歩くほうが楽かもしれない」と話す吉田さん

招待しました。採算面では非常に厳しいところではあります。やはり生の鵜飼いを生かすには、多くの人を呼んでほしいです。昔に比べると鮎も減少し、また支える組合の状況も厳しく、この1、2年が勝負だと考えています。今は長く伝承してきた文化を絶やしてはならないという思いで頑張っている面が強いのですが、厳しいときこそ攻めたい、たくさんの方に来ていただけるよう努力を重ねていきます。

有田のみどころ



得生寺 荘厳な「中将姫会式」

市内の得生寺は、天平時代の右大臣 藤原藤成の娘・中将姫にゆかりのある寺。毎年5月13、14日に「中将姫来迎大会式」では、金色の菩薩の面を付けた5人の小学生が朱塗りの廊下を歩き、中将姫を極楽へ導く様子を再現する「二十五菩薩供養」が行われる。奈良の醍醐寺の観音堂の原型でもあり、和歌山出身の小説家、有田和子の小説「有田川」にも登場する。



写真スポット 工場の夜景にも注目

有田市の産業といえばみかんや太刀魚などの農林水産業と思われがちだが、有田川の河口付近には、東燃ゼネラル和歌山工場の広大な敷地が広がる。工場は1941年度創業、前身は1941年度創業。近年この工場が夜景スポットとして注目されている。紀伊水道の海岸線に沿ってそびえる煙突の群が夕暮れに浮かび上がる風景や、照明で光輝く夜景に惹かれ、写真ファンは、じつと多くの人を集めている。



糸我神社 日本最古のお稲荷さん

稲荷神社といえは、京都の伏見稲荷大社が総本山とされ、全国各地にさまざまな稲荷大社がある。有田市を通る熊野古道沿いの「糸我稲荷」は、伏見稲荷よりも古く、今から約1480年前の安閑天皇(2年)の春に、神が降臨したという由来を持つ日本最古の稲荷神社。境内には3本の神木が並び荘厳な空気が漂う。神社から望める高山には今も神が降臨したという土地が残っている。



箕島漁港 日本一の太刀魚基地

有田市は太刀魚の水揚げ量日本一を誇る。太刀魚漁の大基地である箕島漁港には、漁のためのリヤカーとセリのためのリヤカーが並び、壮観な眺め。操業日には午前3時ごろに出漁し、午後4時ごろに帰港。水揚げされた太刀魚は、美しい銀色の姿が傷まないようにリヤカーに積み、リヤカーごとセリにかけられる。7000~8000台のリヤカーと大量の太刀魚の姿は必見だ。